

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0805 ◆◆◆

24/09/04

【 為替の大変動は 9 月も続くか、経験則からは予断を許さず 】

先週末で終了した 8 月相場は、月間変動幅が前月の 12.35 円にはさすがに及ばなかったものの、それでも 9.20 円となかなかの変動を記録していた。ちなみに、これは前述した 7 月そして 4 月の同 9.41 円に次ぐ、今年 3 位の変動だ。

とは言え、その変動をよくよく見ると、月間高値(150.88 円)は 1 日に記録。そして同安値 141.68 円は 5 日につけており、月の大半はレンジ取引に終始していたことになる。良いことなのか悪いことなのかわからないが、日足ベースでみるなら相場が少しずつ落ち着きつつあることは確かなのかもしれない。

◎「ハリケーン・シーズンの為替相場は荒れ易い」のジンクス、今年も要注意!?

今回の当レターでは、月初の恒例となっている過去の経験則を参考にした、月間見通しを以下で考えて見たい。

まずは 1990 年以降昨年まで過去 34 年間の当 9 月相場の勝敗表を調べてみると、19 勝 15 敗となっている。若干ドル高有利ではあるが、率換算では 6 割にもとどいておらず、それほど大きく偏っているわけではないようだ。

方向性と言うことでは特徴に欠ける 9 月相場だが、別の大きな特徴が見られている。それは「ほかの月に比べて大きな値幅が観測される」ーと言うことだ。

実際に過去の 9 月相場の変動を幾つか取り上げると、その典型例は月間に 11.15 円動いた(年間 3 位の大変動、以下同)1998 年のケースだろうが、そのほかでも 1999 年は 8.20 円(同 4 位)、2002 年の 7.41 円(同 4 位)、2003 年の 7.63 円(同 1 位)、2005 年の 4.94 円(同 2 位)、2014 年の 5.76 円(同 4 位)、2017 年の 5.94 円(同 2 位)ーなどといったように枚挙に暇がない。年間トップではなく、2-4 位クラスの大きな変動をたどることが確かに多く観測されていた。

翻ってみると、為替に限らず金融市場のジンクスとして、「ハリケーン・シーズンの為替相場は荒れ易い」と言われることが儘ある。

やや後講釈気味だが、改めて指摘するまでもなく今年 8 月も、例の「ノロノロ迷走台風」10 号の影響を受け、日本各地で大きな被害を出したことは記憶に新しい。8 月の為替市場が荒れ模様となったのも、むべなるかなと言えそう。そして、足もとの 9 月についても、複数メディアで「日本の南海上に“台風の卵”続々誕生」、「台風発生が続く可能性、9 月は台風シーズン」ーなどと伝えられている。前段部分で、「日足ベースでみるなら相場が少しずつ落ち着きつつあることは確かなのかもしれない」とレポートしたばかりで、その舌の根も乾かぬうちではあるものの、再び大きな変動をたどる危険性を十分に認識しておいて損はなさそう。

一方、為替の動きは一旦棚上げし、過去の 9 月をニュースの視点でみてみると、何故か金融関係の大事件の起こりやすいことが知られている。

実際に幾つか例を挙げると、「プラザ合意(1985 年)」を筆頭に、「いわゆるブラック・フライデーが起こる(1986 年)」「英ポンドと伊リラが ERM と呼ばれた当時の欧州通貨のバンド制から離脱(1992 年)」「大手ヘッジファンド LTCM の巨額損失発覚(1998 年)」「リーマンブラザーズ破たん(2008 年)」ーなどとなる。また 2022 年の 9 月 22 日には、あの 23 年ぶりとなる政府・財務省の 2.8 兆円規模「ドル売り・円買い介入」が実施されたことを記憶している方も少なくないのではなかろうか。

さらに、金融に直接関係ない「大事件」も少なくない。こちらも実例を挙げれば、古くは「関ヶ原の戦い(1600 年)」や「清英でアヘン戦争(1839 年)」「マッキンレー米大統領狙撃事件(1901 年)」「日露戦争終結(1905 年)」「第二次世界大戦はじまる(1939 年)」ーなど。比較的最近では「イラン・イラクが全面戦争へ(1980 年)」「米国同時多発テロ(2001 年)」が、やはり 9 月に起こっていた。

もちろん、上記のような出来事は毎年確実に起こるというわけではない。しかし、今年 9 月に予定されている事柄で考えると、たとえば米 FRB が利上げに踏み切るとは確実視されており、大部分が織り込まれて

